



Title	国鉄のポスター
Author(s)	金野, 弘
Citation	デザイン理論. 1974, 13, p. 40-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53714
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国鉄のポスター

金 野 弘

わたしが国鉄（大阪鉄道管理局）のポスターを描きはじめたキッカケは、特別の深い動機があったわけではない。たまたまその前年日本国有鉄道と日本観光協会共催の観光ポスターコンクールに入賞したのがキッカケといえはいえないことはないという程度のことであった。当時（昭和30年頃）のわたしは、その後十数年も国鉄のポスターを描きつづけるとは想像もしていなかった。

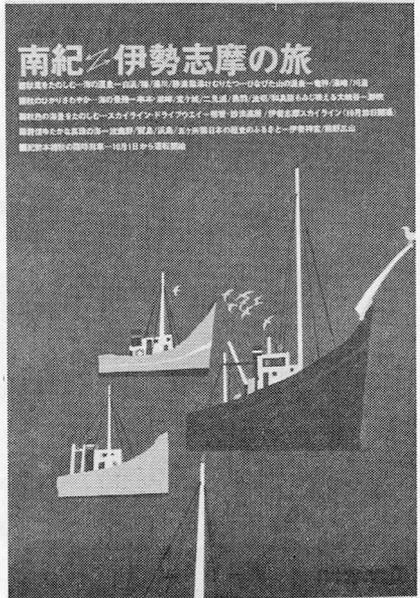
当時の国鉄のポスターは、駅の構内、待合室やプラットホームに掲示され、一種の告示（公示）的な形式をとっていた。車内ポスターも同様だった。それらのポスターはいま見るような美しい絵や写真をとりいれたものではなく、文字といえば毛筆でかいた楷書体であり、その文字を黒、赤、青などの色で白地の紙に1度刷か2度刷で無造作に印刷したものである。デザイン的に処理された現在のポスターに比較すればまことに貧弱なものであった。

わたしは、ポスター制作を依頼されて、これらのポスターともピラともつかない告示板をつくづくながめて「これはなんとかしなければ……」と考えざるを得なかった。それは、今、新しい国鉄のポスター（告示）のありかたを考えださなければ、その機会を失うのではないかと大げさに考えたりもした。

ここで考えられる第1の問題は造形上のことである。書体を現代的にかえたり、レイアウトをもっと新しくしたり、わずかな宣伝予算のなかで印刷度数、版式をどのように有効につかうかなど、従来の形から造形的にいかにかえたり

かということである。次には、国鉄のポスターはどんな機能をもったものでなければいけないかということである。国鉄の主たる業務といえば、いうまでもなく旅客や貨物の運搬である。いかに安価に安全に、きめられた時間に多くの人びとを運びとどけるかということが国鉄の役目のいちばんであると思う。ポスターはこの点を機能的に果さなければならない。それにもっと深く考えてみると国鉄は国鉄自体の経営する観光地や施設をもっていないということである。国鉄のポスターと観光地が発行するポスターや宣伝物と異なる点がこの点にあるのである。そこで業務上の機能をはたしながらさらに加えて何かを強く訴える手段を考えなければならないと思われた。なにを加えるかということそれは「旅情」ではないかと考えた。人を旅に誘いだす情緒のようなものを画面に参加させることが、業務一点ばりの味けない国鉄のポスターに新しい風を吹きこむことになるのではないだろうか。

このような考えかたで最初につくったポスターが写真にある「週末は温泉1泊の旅」である。その後、時代は急速なテンポで移りかわったが、わたしの国鉄ポスターに対する考えかたは変わっていない。テクニックや色彩では変化はあったが。



 2・3月出発!!

伊豆大島・伊豆半島

伊良湖・新穂高温泉

北陸湯涌・湯の山温泉

山陰湯村・萩、湯本温泉

南紀白浜・南紀大島

南紀勝浦・竜神温泉

南部・月ヶ瀬観梅

列島の春を先どり……

早春のエック特選発売

列車とお宿をセットして特別割引料金です。
日帰りコースもあります。●お申込みのご案内は
国鉄駅・旅行センター（大阪・京都・天王寺・三ノ宮・姫路駅）
・日本交通公社・日本旅行・近畿日本ツーリストへ。

 国鉄

1973